

いちご寒 (R・P・ウォーレン)

九歳の少年セスはテネシーの農場に父母と幸せに暮してゐた。六月の或る日、裸足で外へ出ようとすると、今日は季節外れの寒い日、「いちご寒」なんだから裸足は駄目よと母に云はれて驚く。六月に裸足で歩けないなんて、自分が「知つてゐる」事と違ふぢやないか。彼はこつそり裸足の儘外に出た。

前夜の豪雨で鶏舎の殆どの鶏が溺死してゐた。「溺れた鶏ほど、死んでゐるといつた感じのするものはない」とセスは思ふ。「目に青つぽい薄膜がかぶさるので、老いぼれた人の瀕死」の顔みたいだ。川には水が溢れ、橋の附近に人々が集つてゐた。馬に乗る父もゐて、セスを抱上げ右手でしつかり支へてくれた。皮の長靴を履いて立派な軍人みたいな父はセスの誇りだった。牛の屍體が流れて來た。「誰かおぼれた牛を喰つた事ある？」と貧しげな若者が云ふと、元南軍兵士の老人が云つた。長生きをするとな、人間、いざとなれば、何だつて食ふやうにな

るつて事が分るもんさ。

飯炊きのデリィの小屋に行くと、いつも清潔な小屋が洪水にやられて、床下からゴミや汚物がどつさり流れ出してゐた。セスは「そんな汚いものがデリィの家の下にあらうとは夢にも思つてゐなかつた」。

この日の朝、農場に見知らぬ渡り者の男がやつて来て、鶏舎の片付けの手傳ひをしてゐたが、服装は妙だし、ナイフを隠してゐるらしいし、何かと態度が不可解だし、セスは氣になつて仕方がない。父が男に日當を渡すと、男は不満げな態度を示し、父の長靴のすぐ傍に唾を吐いた。長靴に當つたら「何か事が持上つたことだらう」とセスは思ふ。やがて男は立去るが、セスが跡をついて行くとかう云つた。ついて來るんぢやねえ、つけるの止さねえと、喉つ首、搔つ切るぞ。

以上はセスが回想した三十五年前の出來事だが、この後まもなく父は破傷風で死に、父に捧げ盡してゐた母も悲しみの餘り死んで了ふ。しつかり者で、死ぬなんて想像さへ出來ない母だつた。最後にセスは云ふ。渡り者は跡をつけさせまいとあんな事を云つたが、自分は「そのあとをこの年までずつとつけて來たのだ」。

かうしてセスは己れが「知つてゐる」と思つてゐたのとは全く違ふ、醜惡で殘酷で不氣味で危険な世界の存在を知る。無垢の世界から經驗の世界に入り込んだと云つてもよい。經驗の世界では、無垢の世界の秩序の守り手だつた父母も詰りは脆弱な存在でしかなく、不可解な敵意を祕めた渡り者のやうな他者も出沒する。セスが渡り者の跡を「ずつとつけて來た」と云ふのは、經驗の世界の本質を彼が追究し續けたといふ事に他ならない。

今回の大震災に於ける自衛隊の活躍が高く評價されてゐる。自分も自衛隊に入隊して救援活動に攜はりたいと語る被災地の子供もゐるといふ。だが、自衛隊への無理解が正されるのは喜ばしいとばかりも云つてはゐられない。松原正が「自衛隊よ胸を張れ」に於て云ふ、「有事の際に敵兵を殺し、敵兵に殺される」のが「軍人の存在理由」だとの列國の常識は日本の常識ではなく、自衛隊なる「紛ひの軍隊」の異常に殆どの國民が無關心だからだ。それは詰り、國民の大多數が日本の主觀の中に閉籠り、これ迄「知つてゐる」と思つてゐたのとは違ふ世界の存在にはつきり目を見開いて、經驗の世界と眞に對峙しようとしてゐないといふ事に他ならない。即ちマッカーサーの云つたやうに、日本人は今も無邪氣な十二歳なのである。

(小島信夫譯、集英社「世界短篇文學全集」)